

法政大学学術機関リポジトリ  
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

## 山本弘文先生のご逝去を悼む

著者	安江 孝司
出版者	法政大学沖縄文化研究所
雑誌名	沖縄文化研究
巻	42
ページ	18-22
発行年	2015-03
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10114/9972">http://hdl.handle.net/10114/9972</a>

## 山本弘文先生のご逝去を悼む

安江 孝司（法政大学沖縄文化研究所客員所員）

二〇二二年八月二十九日、山本弘文先生が逝かれた。享年八九、新聞報道によれば「老衰による永眠」であられたといえ、大変残念である。

計報は、小生偶々長崎出張中で、九月一日夕方近く、当沖縄文化研究所の木村正子（事務方主任）さんから頂いたお電話によって伺い、驚き、急遽帰京し、小生もご葬儀参列に間に合ったことは幸いであった。

ご葬儀は、山本先生が長年住み慣れた街・三鷹の法専寺で、九月二日に通夜、三日に告別式がおこなわれ、法政大学総長をはじめ、多くの大学関係者、教え子（山本ゼミ同窓会、経済学部同窓会）他、ならびに沖縄研究者たちが、先生との最後のお別れに参集されていた。

扱、ここで、山本先生との思い出を述べるなどして弔意を捧げることが本筋なれど、小生の先生とのかかわりは長く半世紀近くに及ぶものにして、それは幾重にも重なり余りにも多く、たとえ断片的にしても、俄にそれらを行うこと能わぬ状況にして、以下、山本弘文先生の「略歴と学業および人となり」の一端を、かつて私どもが先生の還暦を祝して編み先生に捧げた一書『琉球の歴史と文化／山本弘文博士還暦記念論集』（本邦書籍、一九八五年）の「献呈の辞（名嘉正八郎筆）」と「あとがき」（東喜望筆）にみられる、名嘉・東両先生の意を尽くされての叙述をほぼ再録させていただくかたちで、但し、両文中「」内と傍点付きの数値は、当時を今にして引用するにあたっての安江

による補正もしくは挿入として 認め、ここに謹んで山本弘文先生のご冥福をお祈り申し上げるものである。

\*

\*

〔山本弘文〕先生は、昭和一八年一〇月、東京帝国大学経済学部へ入学され、その年の十二月、「在学徴集延期臨時特例」により金沢市陸軍歩兵連隊に入隊された。翌四月、三重県鈴鹿市陸軍航空整備学校へ入校され、同年一〇月、第二航空軍第二三教育飛行隊（中国東北部・旧満洲）へ配属された。

昭和二〇年八月、敗戦とともに、ソ連に抑留され、ハンカ湖、ハバロフスク付近で労働に従事、約四カ年間抑留生活を送られた。医療品が不足し、食糧事情がきわめて悪い条件の中で、病氣にかかった多くの同僚が帰らぬ人となった。先生は抑留生活中に病氣にかかれたが、九死に一生を得ることができた。先生は、このときのことを、若かったから回復して生きて帰ることができたと話され〔た〕。

昭和二四年九月、復員、東京大学経済学部にて復学、昭和二七年三月同学部を卒業、翌月法政大学経済学部助手に就任された。助教を経て、昭和三八年教授になられた。以来、学生部長、経済学部長、〔図書館長、理事など〕の要職を歴任された。また昭和五三年に在外研究員としてウィーン大学日本文化研究所へ留学、研究のかたわら、日本経済史の御講義も担当された。昭和五四年に法政大学より経済学博士の学位を取得された。その主論文は『維新期の街道と輸送』、副論文は『宿駅制廃止後の道路輸送政策』であった。先生は〔また〕法政大学沖縄文化研究所の所員を兼任〔され、一九八六、四、一―八七、四、三〇は所長を務められた〕。日本経済史に関する多くの論文を執筆されたが、ここでは先生の沖縄関係の論文についてのみ述べることにしたい。

先生は、「薩藩天保改革の前提」、「薩摩藩の天保改革―改革前の状態と改革の歴史的性格―」、「天保改革後の薩藩の政情（一）―いわゆる『嘉永朋党事件』を中心として―」（いずれも『経済志林』）を発表された。これらの論文を発表された頃、昭和三二年初めて「近世沖縄史の諸問題（一）」を『歴史評論』83号に発表された。本論文は、

比嘉春潮・新里恵二・由井晶子・高嶺朝二氏ら当時の沖縄研究者に大きな影響を与えた。近世の沖縄史を研究する者は、先生の本論文を、必ず読まなければならなかった。そして近世の沖縄史に言及する者は、すべての研究者が先生の本論文を精読し引用した。

先生は、「近世沖縄史の諸問題（1）」で薩摩藩の史料に基づき、石高を粳で計算された。先生の本論文は、近世の沖縄史を執筆される人々が引用して、長く研究の主流を占めた。ところが昭和四七年、医学博士で沖縄研究をしておられる渡口真清氏は「沖縄の石高を、田は米高、畠は大豆高の混合高」とされる論文を発表された（一九七五年三月『近世の琉球』所収）。先生は、『近世の琉球』をお読みになられたあと、久米島調査をされた。

昭和五七年「近世久米島の土地所有と地代」（『沖縄久米島の言語・文化・社会の総合的研究』所収）、昭和五九年「近世後期の久米島の土地所有」（『沖縄久米島の総合的研究』所収）を発表された。久米島の地方史料に基づいて執筆された本論文で、先生は、渡口氏のいわゆる「田は米高、畠は大豆高の混合高」を認められた。したがって、久米島調査の成果として、近世沖縄の石高は粳高でなく、米高でしかも混合高であるとされ、昭和三年の論文「近世沖縄史の諸問題（1）」の説を、先生は訂正された。

康熙三〇年（一六九二）『久米具志川間切諸地頭作得帳』（表紙欠、仮題）は、「百姓地に関する記載がないのが難点であるが、当時の土地所有の一端を知るうえできわめて貴重な史料」とされ、「石高のほか、実際の収穫量を見積った『かや』と『正米』の数が記載され、…『かや・丸き・束の称呼は、…慶う検地によって石高制が採用』された後も、こうした衡量法が用いられていた点に注目』され、「田は米高、畠は雑穀高という奇妙な高結びが採用』されたとされる。また田方の収穫量（正米量）が寛永盛増をふくむ石高をかなり上回っていることについて、「慶長検地の石盛が実勢より低かったこと、検地後の生産力の発展がいちじるしかったこと、縄延がかなり大幅だったこと（実面積が検地によって査定された面積を大幅に上回ったこと）」とされ、「慶長検地の石盛が上田一石四斗、中田一石二

斗、下田一石」であつたが、「明治三〇年前後のこの島の平均反収が七斗前後」であつたから、「石高を超える正米量は、もっぱら縄延によるもの」と先生は考えられた（『近世久米島の土地所有と地代』一六一、一六七、一六八、一七〇頁）。

道光二八年（一八四八）の『間切中田畠取立帳』によれば、「当時のおゑか地の正米量（一八二石余）は石高（二三五石）をかなり上回り、その結果公儀上納率（二五・三％）は、康熙三〇年当時の上納率（二三・五％）をかなり下回る」とされ、「農民たちにおゑか地の耕作を課し、正米量の三分の一を彼らに与えるとともに、四一・四％を自己の作得とした」とされる（『近世後期の久米島の土地所有』三七〇頁）。このほか、両論文で近世の久米島の土地所有に関する多くの御指摘があつた。

戦前・戦後を通じて、近世沖縄の経済史研究は、渡口真清・安良城盛昭両氏によつて進められた。先生の久米島の土地に関する両論文は、渡口氏の説を認められ、地方史料に基き、実証的にさらに沖縄研究を前進させた。中国の格言に「及ぶ者なきを憂えよ」というのがある。先生は、〔その〕後も沖縄研究を前進させる重要な論文を発表なさ〔り〕、同時に後輩が早く成長して欲しいと願つておられ〔た〕ように、私には伺える」（名嘉正八郎稿より）。

「学問を拓くのに、時として大胆な仮説が必要なことはいうまでもない。だが、対象の巨大さゆえに、空疎な仮説を立て、奇をてらつて言辞を弄するのは、もはや学問的行爲とはいひがたい。

近年とみに科学的な精緻さを加え、着実な進展を遂げている沖縄研究が、今日の段階に到るまでには、先達の並々ならぬ、地道な努力があつたのはいうまでもない。

山本弘文博士もまた、先覚の一人である。すでに「猷呈の辞」（上掲）で明らかのように、博士は、沖縄の近世経済史に、はじめて科学的なメスを入れ、すぐれた先駆的な業績を残されたが、その学究としての真摯な態度や明晰な学問方法は、とくに沖縄の若い研究者に大きな影響を与えた。

周知のように、学内では博士を、弘文<sup>こうぶん</sup>さんと愛称。それは、博士が教職員や学生から敬慕<sup>けいぼ</sup>されていたためで、じつに四〇余年の間、博士は大学の刷新や学生の教育に献身され、さらに学部長や大学史編纂委員長、図書館長などの重責をも滞りなくまっとうされた。これほど、研究と教育をみごとに統一され、何よりも自己の職場としての大学をこよなく愛された先生もいないだろう。

かつて、法政の組合学校やスキー学校では、必ず、校長先生としての日やけした、弘文<sup>こうぶん</sup>さんの顔があつたし、創設以来、顧問を続けて「おられた」馬術部では自ら杵<sup>きね</sup>をとり、暮れの餅つき大会を開くなど、学生の広く知るところでもあ「った」が、卒業生の媒酌人<sup>ばいしやくじん</sup>をつとめた教授のトップ番付に、弘文先生があげられてい「た」というのは、おそらく学内でも逸聞に属するのであろう」（東喜望稿より）。合掌

（沖縄文化研究所所報第72号より転載）